

2021年3月期第2四半期決算説明会における主な質疑応答

NO	質 問	回 答
1	<p>コロナ禍でのビジネス展開の変化や、変えようとしていることがあれば教えてほしい。</p>	<p>緊急事態宣言下では、可能な現場は約1ヶ月間停止させました。この停止が上半期の完工高の減少に表れています。オフィスの内勤者に関しては出勤率は40%以下を目指してテレワークを導入し、出勤率は上がってますが現在も継続しています。 工事現場のICT化はコロナ前から進めていましたが、クラウドによるデータ共有やWEB会議がさらに整備され、現場業務や打合せなどに活用されています。これらの点が評価され、DX2020銘柄に選定されたと考えられます。 また、リモート勤務できる環境を整えるため、かなりの投資をしました。</p>
2	<p>4～6月に比べて7～9月は、受注がV字回復したような印象を受ける。10月以降の受注状況どうでしょうか。</p>	<p>想定していたよりも第2四半期に受注は回復してきました。 前期比での受注の減少は、商業施設と産業分野の特に自動車関連の投資が一時ストップしたことが影響しました。 もともと、下半期に受注予定の営業案件が多かったこともあり、10月の受注は好調で、下半期の順調なスタートとなりました。工場、データセンター、物流センターの案件情報が増えています。</p>
3	<p>DX銘柄に選定されたのは35社で、上場企業3700社の1%弱であり、建設業ではダイダンともう1社の2社のみだった。独自の取り組みがあれば教えてほしい。</p>	<p>前々期、前期（2018年度、2019年度）が建設業界の売上（完工高）がピークであり、技術者不足が顕著でした。その解決策がDX（i-Construction）であると位置づけ、他社に比べて取り組みが早かったのではないかと思います。 DXは、プレゼン、設計、施工現場、事務のそれぞれのフェーズで考えています。プレゼン時や現場では、図面以外の動画やVRで情報共有することで、客先の理解を得るとともに、手戻りのない効率的な施工を可能とし、利益率が向上したと思います。今は大現場に限られているので、多くの現場に広げる活動をしています。</p>
4	<p>昨年度の上半期は大型案件の受注がいくつかあったようで、それを踏まえると上半期の受注の数字はますますではないか。</p>	<p>30億円以上の大型物件は、昨年度上半期は2件ありましたが、今期は病院の1件のみでした。しかし、10億円以上の物件数は増えており、全体的に多少規模は縮小していますが、さまざまな建物用途の案件を受注できました。 今後は受注環境とともに利益率も厳しくなると思われませんが、業容の拡大を図り利益を確保していきたい。</p>
5	<p>上半期の利益が高い印象だが、どのような理由か。</p>	<p>前々期、前期（2018年度、2019年度）に受注した工場や再開発の大型工事の竣工が上半期に集中したため、利益が結果的にかなり上がりました。ただベースとしては、産業施設の案件に注力してきたことと、現場業務におけるICT化を進めて生産性を向上させたことで、利益率を向上できたと思います。</p>